

自閉症児のこだわりに対応した教育的支援に関する一考察
プレイセラピー場面における遊びと会話の分析を通して

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
松井 真樹

本研究は、自閉症児におけるこだわりを興味・関心の対象として捉えた教育的支援について、プレイセラピー場面における遊びと会話分析を行った。目的は以下の2点であった。まずは、こだわりと遊び・会話の関連を検討した。次に、自閉症児への教育的支援の在り方について検討した。

対象児はドアの開け閉めと描画活動にこだわりを持つ自閉症児であった。対象児の5歳0か月～6歳0か月(2005年11月～2006年11月)に実施された全32回のプレイセラピー場面を分析対象とした。遊びの分析方法は、遊びをテーマ別にカテゴリー化した。次に、カテゴリー別に時間分析を行い遊びの平均出現時間と継続回数を算出した。出現時間が長く継続回数の多い上位4つのカテゴリーの遊びの変容を検討した。会話分析も同様のカテゴリーの遊びを対象とした。遊び開始3分間を分析対象とし自発的発話・応答的発話・会話の持続数の平均を算出した。2つの分析結果に関連するエピソードを提示した。

その結果以下の点が示された。まず遊びの分析では、テーマ別に42個の遊びが抽出され、それらはさらに以下の6つのカテゴリーに分類された。こだわりを伴う遊び、クッキングに関する遊び、買い物に関する遊び、お医者さんに関する遊び、乗り物に関する遊び、その他の遊びであった。最も出現率が高く継続して行われた遊びはこだわりを伴う遊びであった。こだわりを伴う遊びの変化を「エレベーター遊びのための描画活動」と「ドアの開閉を伴うエレベーター遊び」の2つの遊びの関連に着目し4期に時期区分を行った。ドアの開閉を伴う遊びは～期を通して段階的に減少した。減少の背景にはこだわりを伴う遊び以外の遊びの豊かな展開があることが示された。また、描画活動を伴う遊びは～期までは減少したが、～期は著しく増加した。～期から～期では描画活動の意味が異なることが示された。

次に会話分析では、全ての遊びにおいて反応的発話より自発的発話が多いことが示された。～期と経過するごとに遊びの SCRIPT を基に自発的発話から相互のやり取りを含む発話へと変容した。また、人形を用いるお医者さんに関する遊びではセラピストからの声かけを支えに遊びの展開することが示された。

以上の分析から次のように考察した。こだわりと遊び、会話に関しては相互に関連し合うことが示された。中でもドアの開閉などのこだわりを伴う遊びすなわちA児の興味の中で遊びの土台となる力を確立することが示唆された。また、教育的支援における支援の在り方では以下の3点を指摘した。第1は、道具と人といった環境的配慮の必要性である。第2は、自閉症児の独語を含む言葉や要求を丁寧に受け止めそれをやりとり関係に高めていくといった視点が必要である。第3は、子どもの中に思いを生み出させるといった視点である。いずれも、子どもの世界を理解し思いをしっかりと受け止められる大人すなわち指導者・支援者の関わりが求められることを指摘した。